

G型自動織機に関する覚書



名古屋市博物館は、令和5年（2023）10月1日（日）からリニューアル工事のため全館休館に入ります。この誌面が皆さんのお手元に届くころには、休館セレモニーも終了していることでしょう。その様子は次号でお届けするとして、ここでは、博物館内部で現在進めている作業や今後の動向についてご紹介したいと思います。

まず、このたびの改修は機械や配管の設備更新にとどまらず、展示室や収蔵庫の拡張、トイレの洋式化や授乳室の設置などアメニティゾーンの充実、バリアフリー化など広範囲にわたっています。今後数十年にわたって、快適かつ充実した博物館体験を味わっていただけるよう、ハード面からもソフト面からも実施設計を進めているところです。

大規模なリニューアルであるため、工事にかかる時間はおよそ3年。これほどの長い期間、休館するのは昭和52年（1977）の開館以来はじめてのことです。

いよいよ、長期休館へ



豊楽焼 浜松文茶碗



名古屋市博物館だより 236号
令和5年(2023) 10月1日
年2回(10月、4月)発行

編集・発行／名古屋市博物館
〒467-0806
名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1
TEL 052-853-2655
FAX 052-853-3636
http://www.museum.city.nagoya.jp

古紙を含む再生紙使用

考える人、旅にでる

これまで皆さんをお迎えしていたロダン作「考える人」ですが、休館中は、友好館である岩手県陸前高田市立博物館にお引越することとなりました。左の写真は、同作品が、開館時に当館へ運び入れられるときの様子を撮影したものです。重さが900キログラムもあるブロンズ像ですが、輸送時にも同じように、慎重に梱包されて旅立ちます。しばしのお別れですが、きつと陸前高田市の皆さんにも親しまれる存在となることでしょう。そして、リニューアル工事が終了したあかつきには、ふたたび当館へ戻り、博物館のシンボルとして活躍してもらうのです。



写真2 搬入される「考える人」 昭和52年（1977）8月

休館中の活動
博物館の職員は3年もの間、何しているの？
ごもつともなおたずねです。わたしたちは今、新生博物館の実現に向けて、日々打合せを重ねています。たとえば、別館にも事業を継続していきます。たとえば、名古屋博物館だよりや年報の発行、研究紀要・資料叢書の発行、はくぶつかん講座（館外各所にて）、歴史体験セミナー（貸出キット）、特別展「もしも猫展」の全国巡回、「よみがえれ文化財」を活用した修復事業等々…。
そのほか、学校を対象とした事業や、もちろん博物館資料の収集、当地方の歴史や文化についての調査研究も邁進していきます。すでにリニューアル後の展覧会についても準備が始動していますよ。お楽しみに！

最後に、これから新たにはじめる事業をご紹介します。博物館に何が収蔵されているか、27万点から検索できる「名古屋博物館収蔵品データベース」を10月から公開します。このシステムにより、これまでの紙媒体での収蔵品目録にくらべ、求める情報にたどりつき易くなりました。まずは基本情報の公開に注力していますが、徐々に画像データの公開もおこなっていきます。公式ウェブサイトからご覧いただけますので、ぜひご利用ください。

豊楽焼 浜松文茶碗

島村 桂子

令和4年度に豊楽焼、不二見焼、夜寒焼など名古屋のやきものはじめとして113件237点が当館元職員の奥出賢治氏から寄贈された。その中から豊楽焼の資料を紹介したい。



図版1 豊楽焼浜松文茶碗 八代豊助 館蔵

豊楽焼は江戸時代後期に始まった名古屋のやきものである。初代 加藤利慶より「御焼物師」として尾張藩の御用をつとめ、八代 大喜豊助が没する大正14年（1925）までのおよそ130年間続いた。

その製品は、土風炉や雲華焼に始まり、南蛮写、素焼きした器表に絵の具で絵付けした「御所風」製品、四代豊助が創始し人気を博した「木具写」（焼成後に表面に漆を塗り漆器のように仕上げたもの）など多様な茶道具が制作された。

本作は八代豊助作の茶碗である。口径が14・7cm、全体的におおらかな印象のこの茶碗は、低めの高台からやや胴に丸みをもたせ、口元にかけて広がっている。表面にはろくろ目があり、胴から高台に向かって土を縦方向に大きく削った跡が認められる。釉薬は掛けむらがあり、厚くかった部分は黄色味が強い。高台内に「豊楽」の印がある（図版2）。絵付けは、ぼつてりとした筆づかいで松が二本、浜と波の境が茶色の線で引かれ、その上に波がゆつたりと描かれている。内側には青の線が一本横切り、その上から楕円状に白色の化粧掛けが施され、雲のようにも見えることができる（図版3）。

八代豊助は、七代の弟であり、名を春造といった。七代が41歳という若さでこの世を去った大正4年（1915）、家を継承した。大正14年（1925）に八代も40歳の若さで早世すると後継者はなく、豊楽の窯は幕を閉じた。八代目として豊楽焼を背負ったのは、十年という短い期間であったため、作品もそれまでの代に比べると多くは残っておらず、作陶状況が詳しく分かっていない。八代豊助が参加していたコミュ



図版2 豊楽焼浜松文茶碗 八代豊助 館蔵

ニティとして、「一楽会」が挙げられる。有志で名古屋のやきもの鑑賞・研究を行う会で、大正12年（1923）6月から愛知県商品陳列所内の龍影閣で鑑賞会を開いている。同年12月に開催された第二回の陶器陳列会では楽焼が特集され、八代豊助は歴代の豊楽焼を出品している。八代豊助がこの世を去る二年前のことになるが、地元の作家や蒐集家とともに研究に励んだのではないだろうか。

G 型自動織機に関する覚書

天野 卓哉

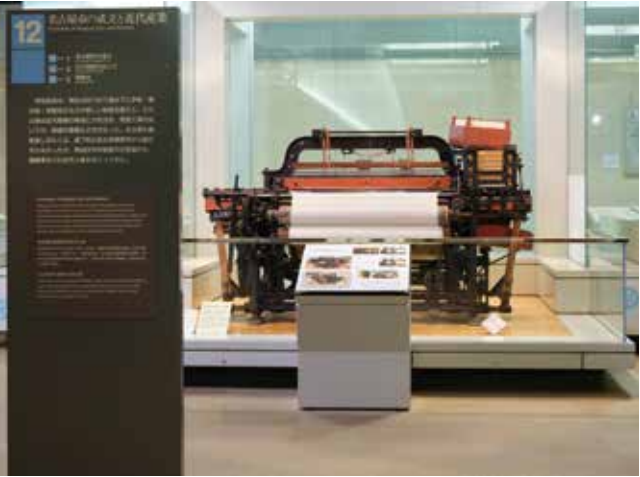
名古屋市博物館常設展示室のテーマ 12「名古屋市の成立と近代産業」のコーナーに、黒くて大きな銅鉄製の機械が展示されていることをご存じでしょうか？（図版 1）

この機械は「G 型自動織機」と呼ばれた動力織機で、輸出用の幅の広い綿布を大量生産するために開発されました。正式な機械名は「^{むていし ひがしきとよだ じどういっき}無停止杼換式豊田自動織機」（図版 2）。トヨタ自動車をはじめとするトヨタグループの創業者（社祖）となる豊田佐吉（1867 ～ 1930）が大正 13 年（1924）に完成させたものです。

当時の動力織機は、緯糸を杼（シャトル）に装填して経糸に送り込む装置を備えていました。生産効率を上げるため、緯糸がなくなった杼を機械が運転したまま速やかに交換する工夫が求められていました。G 型自動織機はこの課題を世界で初めて克服し、綿布の生産性を著しく向上させた画期的な動力織機だったのです。この G 型自動織機を生産するために、佐吉が大正 15 年（1926）に刈谷に設立したのが豊田自動織機製作所（現在の豊田自動織機）でした。

では何故、名古屋市博物館で G 型自動織機を展示する必要があったのでしょうか。G 型自動織機の開発と初期の製作が名古屋の地でおこなわれていたからです。佐吉は明治 44 年（1911）にトヨタグループの企業博物館「トヨタ産業技術記念館」がある名古屋市西区則武新町に拠点を構えて動力織機の開発に取り組み、大正 7 年（1918）に豊田紡織という会社を設立しました。その一方で刈谷にも試験工場の建設を進めていました。

G 型自動織機を佐吉が大正 13 年（1924）に完成させた



図版 1 テーマ 12 の展示風景

と述べましたが、機械の開発は簡単なことではありません。佐吉のリーダーシップによる「チーム佐吉」の努力の賜物と見るべきであり、後にトヨタ自動車を創業する長男・喜一郎（1894 ～ 1952）がその主要メンバーにいたことは見過ごしてはならないでしょう。

どの時点で完成とするのかも捉え方が悩ましいところで、す。G 型自動織機の開発の歴史は、多くは昭和 42 年（1967）刊行の豊田自動織機の社史『四十年史』に依拠しています。完成した段階については、G 型自動織機にとって最も肝要な無停止杼換式の装置（図版 3）の完成とし、特許を出願した大正 13 年（1924）年 11 月としています。この特許は、喜一郎の名前で出願されました。博物館の G 型自動織機のトップレールにも「JAPANESE PATENT」という特許の一覧を列記した小さいプレート（図版 4）が付けられており、特許の登録年月日が表記されています。

改めて『四十年史』を見ると、完成後にすぐには製品化できず、名古屋市市中川区西日置の工場（図版 5）で製作に向けて準備が進められたとあります。G 型自動織機に必要な銅鉄製の部材を鋳造する技術を手に入れるのに 1 年間を要し、西日置の工場で「自動織機の第一号機が完成したのは、大正十四年十一月」と記しています。その後およそ 1 年間は西日置の工場で G 型自動織機は製作されました。博物館の G 型自動織機も西日置の工場で製作された最初期の 1 台と考えられ、アームにある「豊田紡織株式会社」の文字（図版 6）からもうかがわれます。

昭和 35 年（1960）刊行の『刈谷市誌』では完成年が「大



図版 2 G 型自動織機 館蔵



図版 3 無停止杼換式の装置

正十五年三月」となっています。『四十年史』には、この時に刈谷の試験工場の G 型自動織機が「すこぶる好調に稼働」し、「試験工場を営業工場に切替え」たとあります。『刈谷市誌』はこのことを重視していると思われ、『四十年史』刊行以前に、これをもって G 型自動織機の完成とする認識があったことは注目されます。

G 型自動織機開発の歩みをたどっていましたが、実は博物館では G 型自動織機を生産流通に関する「民俗資料」として登録しています。博物館の資料分類上そうなるのですが、技術史や経済史の先生方から違和感が示されることが度々あります。なるほどと思う反面、G 型自動織機に「民俗資料」としての可能性は見当たらないのでしょうか。

民俗資料には機織り具がありますが、G 型自動織機は機織り具が高度に機械化したと捉えることができます。織り具を扱うのは多くは女性でした。近現代の織物工場で働いていたのも多くは女性の従業員（女工）でした。工場で働く女工の様子を「民俗」と捉えて叙述する取り組みが『愛知県史』民俗編で試みられ、豊橋の製糸工場と尾西地方の織物工場を事例に「工場の民俗」がまとめられました。



図版 4 特許の一覧を列記したプレート



図版 5 西日置の工場跡地周辺

また、織機メーカーと織物工場の関係についても、機械の納品や修理などで両者をつなぐ「機料店」という仕事があります。この小文をまとめるにあたり、尾西地方のある機料店で話をうかがう機会がありました。工場主とのやりとりをはじめ、一日に何度も織機メーカーと工場を往復したり、部品の修理は鍛冶屋に頼んだりなど興味深い聞き書きができ、調査を重ねれば「機料店の民俗」をまとめることができるかもしれません。

このような民俗学的な視点から、G 型自動織機に絞ってまとめていくのは今後の課題と言わざるを得ません。来年の令和 6 年（2024）に G 型自動織機は「生誕 100 年」を迎えます。これを契機に技術史や経済史から再検討されることを期待するとともに、民俗学的な立場からも新たな資料の掘り起こしに取り組んでいきたいと思います。



図版 6 「豊田紡織株式会社」の銘文

【参考文献】

刈谷市誌編さん委員会『刈谷市誌』1960 年
株式会社豊田自動織機製作所『四十年史』1967 年
服部誠「製糸と機屋―機械化以後の生業の「民俗」―」『愛知県史民俗調査報告書』6（渥美・東三河）2003 年
愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 民俗 1 総説』2011 年

絵付けを施したのは名古屋の画家・大矢米年である。米年は名を清次といい、明治 14 年（1881）に現在の名古屋市中村区米野町に生まれた。11 歳のときに奥村石蘭（1834 ～ 1895）の門に入って四条派を学び、のちに京都で森川曾文（1847 ～ 1902）の教えをうけ、その没後は久保田米僊（1852 ～ 1906）に師事し人物山水を極めた。明治 28 年（1895）ごろに静岡県浜松の漆器製造所で絵付師として招かれていたこともあり、工芸の分野でも活躍していた。機知とユーモアのある人物で、円満な人生を送ったという。八代豊助と大矢米年の交流がどのようなものであったのか示す資料は見つかっていないが、本作は、名古屋で評判の画家と陶工で制作した遊び心のある作品ではないだろうか。



図版 3 豊楽焼浜松文茶碗 八代豊助 館蔵



図版 4 豊楽焼浜松文茶碗 八代豊助 館蔵（茶碗内側）

られる。加えて、茶碗内側には、細かい黒色の粒が表面に付着しており、燃料の破片が焼成の際に溶けた釉薬にこびりついたのではないかとみられる（図版 4）。今後、さらなる詳細な分析が必要であるが、八代豊助の作陶活動の具体的な様子の一片がうかがえる作品である。

【参考文献】
名古屋市博物館 企画展図録『名古屋のやきもの豊楽焼』平成 7 年
野場喜子「豊楽焼をめぐる人々」『名古屋市博物館研究紀要 20』平成 8 年